

## 四日市市公害と人権

海蔵小学校 古市 晶子

### はじめに

海蔵地区から一部分ではあるが霞ヶ浦のコンビナートが見える。また、3年生のとき社会見学で四日市港ポートビルから霞ヶ浦のコンビナートを見て海岸沿いにコンビナート広がっていることを知っている。しかし、コンビナートが自分たちの生活と深く結びついていることにほとんどの子が気づいていない。「四日市公害があったということを知っている人」と尋ねたときも「知っている」「聞いたような気がする」を含めて学級の約半数であった。私自身、四日市公害を社会の教科書や資料集の範囲でしか教えた事がなかった。一昨年、初めて「四日市公害と人権」という資料を見て、ぜんそくや公害に立ち向かった人たちだけでなく偏見や差別で苦しむ人たちがいた事を知り、胸が熱くなった。さらに資料を検討して本になると聞いて、これを使って授業をしようと考えた。

### 目標

- 今から約40年前四日市公害が起こった原因を知り、四日市喘息に苦しんでいる人々の思いに気づくことができる。
- 四日市公害裁判について知り、公害裁判の結果、市民・工場・国・県・市などが二度と公害を起こさないように努力している事を知る。
- 当時の様子や人々の思いを知り、それを書いたり発表したりすることができる。

### 学習計画 (10時間)

- 1 コンビナートと私たちの暮らし①
- 2 四日市公害がおこったわけ①
- 3 四日市ぜんそくについて①
- 4 磯津漁民一揆と四日市公害裁判を起こそうと決心したわけ①
- 5 まわりの様子②
- 6 学校での様子②
- 7 四日市公害裁判の結果とその後の四日市市①
- 8 「変わりゆく海とともに」のビデオを見て感想を書く①

### 実践から

コンビナートで作っている石油化学製品が自分たちの今の便利な生活に欠かせないものであることに気づき、「ぼくらの教室のほとんどのものが石油製品でできているなんて知らなかった」という驚きをもった。コンビナートができるまでの四日市港の白地図を黒板にはり、海蔵小学校の位置を記した。そこに、第1コンビナートを貼り付け、塩浜地区が近いこと、鈴鹿川の向かいに漁で生活している磯津の町があることを確認した。学習が進むにつれて白地図に第2・第3コンビナートを付け加えていった。

まず約40年前のコンビナートの写真を見せた。「けむりではっきり見えない。どんより

している」「暗い感じがする」「晴れているのか曇っているのかわからないくらい暗い」というのが感想だった。現在のコンビナートの写真を並べて見せると「えっ、これが同じコンビナート」「信じられん。」「今ははっきり見えるしきれいや。」「けむりで空も空気も汚れてしまったんや。」という声があがった。「これが四日市公害の姿です。これからこの四日市公害について学習していきます。」この言葉に子どもたちは、「なんでこんなに空が汚くなったの。」「40年位前はこんな所でみんな暮らしていたの。」など四日市公害についてもっと知りたいという気持ちが出てきた。

### 四日市公害裁判を起こそうと決心したわけ

公害裁判を起こそうとしたわけについて、野田之一さんのお話をもとに考えさせた。(資料1) 子どもたちは、「ぜんそく患者が増え続け、ついに自殺する人が出てきた。」「工場に訴えに行っても『うちじゃない』『うちじゃない』と人事みたいにしていて頭にきた。」「行政に頼みにいっても工場と同じで『俺はしらん』と人事にしている。」「澤井さんとか善良な人に『法律があるから法律に照らし合わせてみなさい』と教えてもらって裁判できることを知った。」などの答えが出た。その中で、第一コンビナートができて、公害患者も出ているのを知っているはずなのにどうして第二コンビナートをつくるのか不思議や、ぜんそく患者が増えているのに「うちじゃない」というのも責任逃れやという子どもたちの思いが出てきた。その後「早くきれいな空気を」という瀬尾喜代子さんの作文を読んで感想を書き、出し合った。「原因がけむりで苦しんでいる人がこんなにいるのに県はほっとくの？無責任すぎるよ。喜代子さんはやりたいことがいっぱいあったと思うのにやめて世話するって悲しすぎると思った。」「・・・公害ぜんそくは、病気にかかった人だけでなく他の人もつらい思いをしなければならぬなどコンビナートができただけで、すごい数の人が不幸になったのだなと思いました。」など自分のこととして考えられる子どももいたが、「・・・喜代子さんのお母さんはぜんそくにかかって苦しくてかわいそう」「・・・ぜんそくにかかったお母さんや喜代子さん、妹、弟がかわいそだと思う」という感想が多かった。

### まわりの様子

まわりの様子についてのプリントを一人ずつ声を出して読ませた。(資料2) 読み終えた後で「えー」「おかしい」という声が聞こえた。そこで、「今からプリントを読んでおかしいなと思うところに線を引きなさい。どうしてそう思うのかわけも言えるようにしてください。」と指示した。その後の話し合いでは、『裁判に勝てっこない』と言うけどやってみなきゃわからないし、このままでは公害患者はどんどん増えていく。裁判しかもう方法はないんだからやらなきゃいけないと思う。」とか『公害は終わった』というのはおかしい。自分の家族に公害患者がいて、その人が死んだら公害は終わりとはいえない。死んだときはすごく悔しくて悲しいと思う。その悔しくて悲しい気持ちを二度と誰も味あわないように公害活動をしていくべきだと思う。」などの意見が出た。その中で「先生、長引く裁判を

横目に新しい第3コンビナートの建設は進められましたって書いてあるけど何でなん。」  
「公害が広がるとのわかつとのに工場で働いている人は知らんだんやろか。」「それはないと思う。」子どもたちの中に疑問が出た。

そこで、公害反対運動で立ち上がった人たちがたくさんいたことを知らせるために、『公害反対運動の広がり』のプリントを渡した。(資料3)運動会で公害をとりあげた事や工場で働く労働者も反対運動をしていることに子どもたちは驚いた。また、「素顔でビラ配りをして反対運動をしている人を配転するなんて工場はまちがってる。」「コンビナートで働いている人もつらいんだな。」という意見が出た。

四日市公害の学習が進むにつれて子どもたちの中でコンビナートがこなければ公害は起こらなかったという思いが強くてできた。そこで、「コンビナートがなかったらよかったかな。」という投げかけをした。「最初は四日市市民も喜んで迎えたけど、公害が起こってやっぱりコンビナートはいらないと思ったと思う。」「コンビナートが亜硫酸ガスを出しているからコンビナートがなかったらぜんそくで苦しんだり死ぬ人もなくなると思う。」という意見のなかで、「お母さんにコンビナートはいらんとすると言ったら、お母さんが『コンビナートがなかったら生活できやん』と言うとった。」「どうして。」「『ぼくらの生活でつかつとるものはほとんどコンビナートでつくつとるものや』と言うとった。」「そうやった。」「前勉強したんやった。」(やっと1時間目に学習した『コンビナートって何』という学習と結びついたのだ)コンビナートは必要だけれど、公害は許せない。子どもたちの中でもややもやしたものが残った。「亜硫酸ガスがでない工場はできやんの」「けむりをださんだらええ」「先生、公害裁判の結果はどうなったの」「絶対勝ってほしい」という思いへと変わっていった。

## 学校での様子

『学校では・・・』をこの単元でどうしても入れたかったのは、子どもたちの社会科での学習の様子を見ていて四日市公害を公害の様子や公害裁判の経過だけに終わらせたくないなという思いがあった。40年ほど前は、四日市公害に対して十分な知識もなく、どう対処してよいのかわからない状態の中で偏見や差別を生んでいったと考えられる。その事を学習することで、子どもたちに自分の生活と重ね合わせて考えさせ、自分の周りにある差別や偏見を見抜く目、それに立ち向かおうとする力を少しでもつけていきたいなと思ったからである。

## 公害病はうつる～小1の子どもが公害病患者の父親の話～(資料4)

プリントを渡し、思った事を書かせてから発表させた。最初は、「公害病は、好きでなつたわけではないのにいじめられてかわいそう。」「友達と遊んでいたのが『遊んだらあかん、うつるよ』と言われて遊べなくなつてかわいそう。」という意見がたくさん出た。話し合つていくうちに、「公害病になりたくなかつたのになんで本人の前で『公害病の子と遊んだら

うつるよ』って言えるのか。」「すごく嫌な気持ちができる。何であんな事が言えるのかと思う。差別だと思う。」「公害病のせいで友達がいなくなって私だったら絶対嫌だと思った。」とか「友達と遊べなくなってこの子はさびしいと思う。」「自分だったらすごく嫌だから、公害で遊べない子がいたらその子を一人にしないように考えると思う。」など自分のこととして考えた意見も出てきた。

H子が、「もしかして、このお母さん喘息がうつらないと知らなくてうつると思い込んでいたのかもしれない」とつぶやいた。「ぼくも今は社会で勉強して知ってるけど、40年ぐらい前は知らなかったと思う。」当時は何もわからずに公害病にかかったら治らないし、公害病を怖がっていたのではないかというこの考えに一瞬そうかもしれないなという揺らぎが子どもたちの顔にみられた。「でも、言われたらいややで。」「やっぱりお母さんは差別してるんや。」「べつに公害病の子と遊んでもいいじゃないの。」公害病であろうとなかろうとお母さんの態度はおかしいという反論で「やっぱり『遊んだらあかん』という言葉はおかしい」ということが子どもたちの結論になった。

「ずる休み」といわれて～澤井余志郎さんの記録から～を1時間学習した。

学習した後の感想・・・「さ津子ちゃんのように苦しんでいる人もいてそういう人を助ける人もいれば「うつるよ」とか「ずる休み」という人もいる。このことは、公害病とかの病気だけでなくいろんな事にも当てはまると思う。そのことを考える事はすごく大事な事だし重要な事だと思う。・・・」「・・・夜中の発作のひどさを写真をとって証明してごかいをときたいと思うくらいお母さんもつらかったと思う。さ津子ちゃんもお母さんも『ずる休み』と決めつけられてほんとうにつらかったと思う。」

#### 四日市公害裁判の結果とその後の四日市市

「今日は四日市公害裁判の判決をします。」子どもたちは、じっと私を見つめていた。「判決。『原告患者勝訴』』と言うと、「わー」「やっぱり」という声と「勝訴ってなに？」という声が交錯した。板書すると、子どもたちは「よかったな」「瀬尾喜代子さんのお母さんも生きてたら喜んだのに」とつぶやきながらもほっとしたようだった。

裁判の成果とその後の四日市市のプリントを配り、工場、市民、国、県、市がしている事を読みあつた。また、市のコンビナート各社の公害設備が世界の水準を誇っていることや公害防止技術を学ぼうとやってくる人がいる事を知り「四日市が世界の最高水準なんてすごいなあ」「四日市は変わったんや」という感想が出た。最後に「四日市公害は終わったと思いますか。」という発問をした。ほとんどの子どもたちが「まだだと思う。」と答えた。

「どうして。」と尋ねると「まだ喘息で苦しんでいる人がいる。」と答える児童が多かった。中には「公害裁判で勝って工場が亜硫酸ガスを出さなくなったけど、油断したらもしかして同じような事が起こるかもしれない。」という考えの子どもがいた。

「変わりゆく海とともに」のビデオを見せた。四日市公害裁判を起こした野田之一さんは

学習の中で、何度も名前がでてきて子どもたちもどんな人かな、今も元気にしているのかなと知りたがっていたからである。ビデオを見た後、野田さんに会いたいなあという子どもがたくさんいた。ビデオを見た後『野田さんへのメッセージ』という題で感想を書かせた。

### 『野田さんへのメッセージ』

○私は四日市公害を勉強するまで、コンビナートはふつうの建物だと思っていたけれど、勉強してコンビナートは亜硫酸ガスを出し、汚れた水をそのまま海に流すなんてとてもいけないことをしたんだなあと思いました。野田さんは、公害病患者になっても猟師を続けているなんてとてもすごいなあと思いました。裁判に一億円もお金がかかるのに勇気があって私だったらぜったいできません。でも、みんなのために、家族のために、四日市の自然のために裁判を起こして勝訴して本当によかったです。

○ぜんそくで苦しんでいるのにちゃんと漁を続けられるなんてとてもすごいことだと思います。私なら苦しくてもうやめてしまうんじゃないかと思っています。そこまで「生きたい」と思っている野田さんをすごくそんけいします。このまま小学生のみんなに公害のことなど教えて行ってほしいです。けっして人事と思ってほしくないからです。

○今でも四日市公害は続いていて、公害で今も苦しんでいる人がいるんだなあと思いました。さいばんに勝っても、野田さんのように公害の発作が続いているから公害病は治らないのかなあと思いました。公害のもののけむりはまだ少し残っているから公害はまだ終わっていないんだと思います。

○今頃公害がなかったらもっとしあわせにらせていたと思う。コンビナートはみんながきたいしたのにガスのせいで四日市ぜんそくになり、海もよごして最悪ですね。ぼくもこういうときだと漁民一揆をします。裁判で勝ってぼくはよかったなあと思いました。これからも長生きしてください。

○野田さんが記録されたことをビデオで見て、野田さんの苦しめられた猟師生活、ぜんそくの発作で死ぬような思いをしたことなどがすごくよくわかりました。公害病というおそろしい病気は二度とあってはいけないことだと思います。もし、私が公害病になり、ありゅうさんガスで苦しめられたら工場をこわしたかったと思います。空は灰色。どんよりとにごったその中でまだまだ続けてでるけむりと聞いて、今このようにきれいな空気をすることができ、とても野田さんたちがものすごいことをしたんだなあと思います。私ならこんな勇敢なことができたかなあと思います。そして、最後にまだまだ公害病は治らなくてつらいことだと思います。でも、さいばんに勝って野田さんもきつとうれしかったと思います。そして、野田さんたちのおかげで私たちが今を生きられていると思いました。

### 成果と課題

○四日市公害の学習を始めたころは、昔あったことと自分たちと関わっているという思いがほとんど見られなかった。しかし、学習を進めていくうちに、自分だったらどうする

か、自分の家族や友達が公害病にかつたらどんな思いがするかなど少しずつ考えられるようになった。また、今きれいな空気が吸えるのは長い間野田さんたちが差別や偏見に負けずに公害裁判を続けてくれたおかげだという、40年前の出来事と今の自分の生活と結びつけて考えることもできた。

○周りの様子や学校での出来事などを学習するなかで偏見や差別があったことに気づいたり、自分の生活と結びつけて話し合ったりすることができた。

○子どもたちが親や祖父母と公害について話をしたり、学校で話の内容を紹介したりしてくれるようになった。

○ほとんどの子が「公害は終わったとはいえない」と考えている。『けっして、人事と思ってほしくない』という思いをもっている子どももでてきた。この思いを大切にしたい。

○四日市公害を体験した人の話を聞くなど人との出会いを単元計画の中に組み込めたらもっと子どもたちの中に疑問や深まりが生まれたのではないかと思う。

## 終わりに

四日市公害の学習は、自分にとっても子どもたちと共に考えたり、悩んだりしながらの学びができてよかったと感じている。この学習を通して自分たちの住んでいる四日市に公害があったことや公害病で今でも苦しんでいる人たちがいることは絶対忘れてはならないと思った。四日市公害のことをもっと自分なりに勉強して子どもたちに何を伝えていかななくてはならないかを今後も考えていきたい。